Abhinavagupta の禅定論

佐　藤　道　郎

Abhinavagupta (A. と略) の *Bhagabadgītārthasaṁgraha* の中の修行に関する所説，特に静慮 (dhyāna) についての第2章の Yoga の部分 39～72 偈の注釈を主に考察する。他に XVIII, 52 等にも散説され，更に *Tantrāloka* でも関説されているが，ここから始める。39～61 偈の主題を A. によって以下にあげる。業果の束縛の脱却には Veda の文句や儀式に依らず，無執着に事の成否を問わず平等観を以て Yoga を実習せよ。かかる理性の修練は業果を離れ，迷妄を超えて不動となり，心中の欲望を捨て自己に知足し好悪に中立を達成する。しかし感官が心意を運ぶので，至上神に専心帰依して坐すべきで，そのとき感官が制御され，理性が確立するという。

これらの諸偈について A. は Yogin の境涯を中心に述べる。Yogin は不動の三昧に住し，理性の実習により業果を捨離し，智慧が確立され，梵的存在に達している者であるが，Yoga 実習について以下の4つが問われる。1：如何なる言語的表現が適当か，2：その自相は如何であるか，3：如何に坐すべきか，4：反復修行しつつ如何にして了達すべきかである。これらの所問は段階的に解明され確定される。感官的世界と異なる特質をもつ坐によって最高我と合一せしめる。その際，味覚は消失するが，Yogin には至上神の知見からの染着も存しない。他の苦行者にはそれらの味覚は消失せず，意を感官に運ばせられる。Yogin によって心意は克服せられるとする。神に帰依し，自らを Ātman を至上神とみなし，反復修習するがよいと教示する。以上の後に Dhyāna を中心的主題とする 62～72 がつづく。主題は以下の如くである。外境に執着する欲望，そこから忿怒迷妄，記憶の混乱，理性の喪失と滅亡が継起するを説き，感官の制御自制により平安となり，苦悩の除去，理性の確立を教示する。修行における感官と対象との関係を抑制と思慮と我欲の捨離と自我意識なく行動することの達成が言われ，この境地を梵即涅槃の境地とする。

これについて A. の注釈を本文の引用を除いて示すと次の如くである。

「苦行者達は対境を捨離し，対境の把握に完全に精通するであろう。何となれば彼らは静慮し，捨離しているからである。静慮の時に妨害等が起こっても，如実に変わらず，

顚倒を放捨して智慧性が確立しているのであるから。しかし意が抑制されている人，その人は対境に，また意に迫られても，忿怒等の波動がおくられて来ても，その智慧の確固たる人は，正しく Yogin であるという趣意である。そして Yogin は一切の世間の慣習を為しつつも世間を超出している。主宰神によって注意深く観察せしめられた者が，凝縮してその自相を述べる。一切の生類の夜が迷乱している幻（māyā）であるそこにおいて，聖者はめざめている。何故にこの（迷妄の夜）は捨てられるべきかという。そして世間（Loka）がめざめているそこにおいて，聖者のその夜は10の多様な望ましきものを作る。それ故にその世間は世俗の慣行からめざめていない。この幻は実にその迷乱性において名色を，そして楽の継続の外観をもつものである。その場合，世間は以前のその幻の自相を把握してもまた第二番目の外観に縛られた想をなす。しかし Yogin はかくの如き顚倒せられたそれらの迷執をそこで根こそぎにするために諦観する。真に，不正な知をみつつある人が，そしてまた不正な知は侵害されたことによるから，それらの楽の継続を信じている人が見るのは，正しくその夜であるということは明白である。あるいは，Yogin が知においてめざめているその場合，一切の痴愚は無知にめざめていない。そこで衆生にめざめていないというのはまた明らかなことである。Yogin は欲望の対衆と外的に離れていなくとも，しかし感官の本性によって対象の中に入りつつも，あたかも河の奔流が太洋に行くようにでは決してない。かくの如きが第三の確定である。かの Yogin は一切の欲望を放捨したことから，寂静の形相，解説に赴く。これが梵の実在である。臨終の唯一の瞬間に確定し，安住に達し，身体の区別に従って，最高梵を獲得する。ここにおいて四つより成る問題が確定した。かくの如きが Śiva である。この章句が要約である。」

以上においてみられる執着を離れる過程は，まず外的対象を拾離し，それと相関的な内的な意をも離れることを第二とする。第三は，現実に対象があってもそれに執着しないことであり，第四は，梵なる涅槃，即ちここでは Śiva と一体化することである。外的客観的対象から離れても，心がその対象に付着したり，あるいは，対象から無執着となった心の状態に執着するならば，その足跡を残しているから執着しているといえよう。日常生活における事物とのかかわり合いにおいて，そのさ中における無執着の実践法を教示している。Gītā そのもののこの箇所やその他の所説，シャンカラ等の説は詩的ではあるが，羅列的，複合的，平面的な印象を与え，哲学的に統合せられた見地を示すものとはいい難い。が，A. の注釈の説は立体的，統一的で一元的見解であり，Kashmir の Śaiva の一元論をここにみることができる。Gītā を介して Śaiva の実践を示すことが意図されている。無執着に，無我において対象や自心を明確に理解することと，迷妄の夜

の Māyā 的なものを根こそぎ徹見する実践的方法[2]がここで静慮を中心にして明確に Yogin の境涯から述べられている。

さて次に，この章以外におけるこの問題の展開，即修行の実際の展開を追う必要がある。紙面の都合上要約して，この A. の展開した注解を第18章までにわたって見ていこう。執着なく，我所なく行為することの強調（第3章），この世界における各々の行為においてただ唯一なる神をのみ想起すること（第6章），Śiva 神は内外到るところに現前している。神の本性は顕現している（第8, 9章）とする。各々の思惟と行動は神の中で行なわれているのであって，その動きの中に思想はなく，神は一切の源泉である（第10章）。この世界の生成と三界は神の直観においては，神は一切に遍在し，清浄，不清浄の区別なく，Yogin にとっては世界は一つである。この宇宙的意識において Śiva 神と一体化する（第11章）。Yogin は致る所で Śiva 神の実在をみる（第12章）。かくして神を識るならば Puruṣa と Prakṛti は二つではなく一つである。三徳は個々にはあっても universal なものでなく，三徳をものとしてでなく一動の波動（Spanda）の如くに解する（第13, 14章）。一切の活動の中においての修行，すなわち禅でいう動中の工夫とでもいえることが認められる（第15章）。善悪の分別を離れ，しかし悪をなさず，人生の究極を Śiva 神との合体，Śiva 神への帰依，業苦からの解脱，分別知を砕くこと，これが Viṣṇu 即ち Śiva 神の世界である。自己，我の美化でなく，自己の行為のあらゆる時と場所で，Śiva 神との合体を得る事を事として行為せよ（第16～18章）ということが結論である。

A. の Gītā 注の特徴は，文字どおり各々の偈に語義を解説し，文脈を追って解説を加える注釈，あるいは他の学説を批判することをも含めている類の注釈書ではなく，時として語句を追うことはあっても，その章句における問題の提示とその解説とみられ，いわば Gītā の一小綱要書といえる。その場合，Śiva 派の伝統と彼の見地を述べていると一般にみられるが，ここでは一元論的な理解を Yogin の境涯と解脱の方法を中心として述べていると指摘し得る。

静慮についての以上の理解は，Gītā の注釈という形でみられるが，それよりも独立かつ体系的に哲学が述べられている。A. の主著，*Tantrāloka*[3] 中の静慮の説をみていき，Gītā におけるそれの理解に資したい。*Tantrāloka* の第5章19b～42に静慮における精神的方法がまとめて述べられている。その前に，第4章92～96偈において静慮の位地づけをみると Pratyāhāra, dhāraṇā, dhyāna, samādhi の順を追い，この点 Yoga-Sūtra の八支と同じ順である。制感とは，対象と

の眼等の感官の結合を解き，内的固執の外は何もないことであり，その内的固執はまだ結合されていない繋縛の固執である。執持はある対象に精神を結合させることであり，静慮は（その対象）と相等な識の相続であり，完全な没入（astamitā）である。しかし三昧においては常に意識に所知と同一が生じ，所知，能知の二元（の対立）がなくなる。これら執持と静慮と三昧は三体同一の組織であり，継目はない。最高の意識を得ようとする限り，それによっては何の効果もない。以上のような位置づけから，更に静慮についての記述を上記第5章からみていくと，静慮は以下のような特質を持っている。

「自立的に光り輝く精神の本性は心中に確立している。その心の内部にあるものをみる真実を知れるものは，あたかも Kadalī の花序が（多くの花の集まりであって）半球形をつくり，内でもあり外でもあることがいたるところで同時に存する如きを見るようだと譬えている。太陽と月と火との結合を静慮している Yogin は注視しなければならない。この Yogin の静慮から，丁度の発火のため二本の木を激しく擦るようにして火が燃えるように Bairava（Śiva）の火が心中の聖なる大きな空処において発火し，燃え広がる。太陽と月と火の Śakti においては三体同一体であり，無限の功能を持つ Parā と Parāparā と Aparā と相応する。創造と保持と消滅によってそれら三つには各々の相があり，第四のものは限定されない具体的な，造作されたものでない。このように，Parā 等のそれらは女神によって太陽の円盤に現存し，12であり，一つ一つ，太陽と月と火とそれらの消滅の現前である。この無上の輪（cakra）は心から眼等によって，空中を通って流出する。あれこれの所知の領域にわたっても同様である。そのために，その創造と保持と破壊の順序に従って，太陽と月と火の光を本質としているものは，この車輪の光によって現形が不動に確定している。かように，声等の対象においては，耳等の空腔を通ってその輪によって生起しており，同一の性質から成り立っているものと考える。この決まった仕方によって，それはどこにでも生起する。一切の本質より成る輪は大いなる地上の一切の王国をどこにでも現成する。かくの如く，一切の道の集合は，意識によってとり囲まれた Bhairava の大きな輪によって労せずして消失する。それ故に，一切の消滅に於ても，潜在印象のみによって自己自身が跳出し，それによって輪回し，輪は大と考慮されるべきである。この静慮によって，このように燃やされるべきものが消滅したことによってその潜在印象も滅尽するから，輪は消滅せしめられ，あらしめられて，それ故に寂静であり，寂滅である。この静慮の方法によって，一切がこの輪において消滅し，その輪は意識において消滅し，かくして意識は対象が失なわれたように見える。精神の自性に基づき，それ故に新たな創造があり，精神は，Durgā 女神である。かように一殺那，一殺那に一切は自己の意識において消滅する。そして再びそれを放射する。

このような者は永遠に Bhairava と共に歩み（一体化する）。かくして三叉戟から4の輻（araka）が生起し，順次に5の輻，50の輻，64，100，1000，無数の輻を Yogin は了知し，輻を不異の智ある人は修す。意識の主，大いなる神は意識を出現させた。だが，少しも惹起させるものではない。一切の功能の大なる主権者である。彼の功能は一切全世界である。功能を持ったものは大自在天である。と，*Mangalaśāstra* において Srīkaṇṭha は言っている。といい，第一の方便の形は静慮であると Śrīśambhunātha（インドラ神）は私に教示し，私に満足した。彼のために善慧（Sumati）尊が（教示した）。この人は，他の方法，他の静慮に依存するが，無上の方便である軛であるものに，階程なく赴かしめる。」

以上の偈文によって A. の静慮の説は，内在的超越，個我と最高我との合一，真の自己の発見が直観（pratibhā）であり，神の中に本来的にあった自己を再認することで一切に神をみるものであって，世界を幻化迷妄として否定していない。内外の区別なき万有在神論的神秘主義と解される。そして世界成生の説明 Ābhāsa や Śakti，数論説を依用するこの世界の現成の解説を含んでいるが，具体的な方法に欠けるものではない。例えば Yoga の8支の Yama, Niyama, Āsana, Prānayāma は外面的意味をもつにすぎない[4]。自己実現を常に追求し，そのために種々な方法が準備されている。その中で静慮は高度の修行者の方法である。涅槃への到達が Gītā で説かれるように，神の思寵が降るならば特定の成就法を修することなく真理を徹見できるのであって，生きている間に悟達が可能である。その道が開けない人に儀式，念誦，神への帰依等の道がある。こうした Kashmir の Śaiva の全体の中で静慮のもつ方法的意義の重要さは *Gītā* 注のその実践的，動中の工夫的面と *Tantrāloka* の理論的，定中の工夫的面の双方によって提示されている。*Gītā* の全体から A. はYogin の世界より無執着の行為を中心的主題としてとり上げて多くの注釈書の中にあって最も一貫した見方を示しており，*Gītā* にかくされたと称する意味をここに提示している。

なお，不殺生の問題（Gītā XVIII, 17*）等の現実態の分析や，*Yoga-sūtra* や *Gītā* の他の諸注釈との対比，法句経から中観，唯識学説までの仏教との関係，西チベットと Kashmir の Śaiva との歴史上の交渉の問題，禅宗等神秘主義的行の問題は他の機会に譲ることにする。（Text Pansikar Kashmir 版による）

*A. は「一切の事物は法，非法の二により区別され理解されている。然し他の人々は智慧が完成していないから不確実な知識によって主宰者を考える。離繋している人は業をなさない」と解する。

（岩手大学教授）